

令和8年度 府中明郷学園 教育研究推進計画

1 学校教育目標

自律

～社会に開かれた教育課程の推進による、自ら考え、判断し、行動する児童生徒の育成～

【目指す児童生徒像】

思いやりの心を持ち、夢と志を抱き、自らを鍛え互いを鍛える児童生徒

2 研究主題

つなぐ、広がる、自律した学び

～学びを自らの手に～

3 研究主題について

現代社会は、激しい変化と予測困難な事象が次々と起こる「正解のない時代」である。こうした社会を生き抜く児童生徒達に必要なのは、単なる知識の蓄積ではない。児童生徒に求められるのは、断片的な知識の量ではなく、それらを自在に組み合わせ、他者と協働しながら未知の課題に立ち向かう「生きて働く力」である。児童生徒が受動的な「学習者」から、自らの学びをコントロールする「自律した学習者」へ成長を遂げることが求められている。

本校では、目指すべき学力を、基礎的な知識・技能を基盤としつつ、自ら問いを立て、試行錯誤を繰り返しながら学び続ける「自己調整力」と定義した。つまり、「自律」とは、単に一人で学習することではなく、自分の現在地を知り、目標達成のために必要なソースを自ら選択したり、それに向かって挑戦し続ける姿勢である。しかし、児童生徒の実態を鑑みると、教師の指示を待つ姿勢や、正解を求めることに終始し、プロセスにおける試行錯誤を避ける傾向も見受けられる。自律した学習者を育成するためには、学習のスキルだけでなく、その基盤となる「**自律心（内面的な強さ）**」を**道徳教育等**を通じて育むことが不可欠であると判断した。加えて、児童生徒の自律心を育成するためには、教師の役割を「知識の伝達者」から「学びの伴走者」へと転換する必要がある。その具体的な手立ての第一の柱が「**精選された発問**」である。児童生徒の思考を揺さぶり、多面的・多角的な視点を引き出す問いへと質的転換を図る。「なぜそう考えたのか（根拠）」「どちらの方法が効率的か（比較・選択）」「もし～だったらどうなるのか（仮説）」といった、判断や選択を伴う発問を意図的に仕掛ける。これにより、児童生徒は「教えられる」立場から、自らの問いに対して納得解を構築する「主体」へと変容するだろう。また、教師にとって発問を精選することは、児童生徒の思考のプロセスを自覚し、学びを自分事として捉え直すための欠かせない契機となる。第二の柱は、「**ICT機器の効果的な活用**」である。GIGAスクール構想によって整備された端末は、自己調整学習を加速させるための強力なツールである。ICT機器を活用することで、思考の過程をリアルタイムで可視化し、他者との共有や比較が可能となる。自分に合った学習のペースや方法を「自ら選択する」場面を設定することでICT機器を「使われる」のではなく、目的達成のために児童生徒が「選び取る」ことになり、学びの主導権を児童生徒に委ねることができるだろう。

学びを「つなぐ」とは、前期課程から後期課程への円滑な接続だけでなく、学校での学びを社会や実生活へと「広げる」ことを意味している。前期課程においては、学びや振り返りの「型」を身に付け、自己の変容を自覚する「土台形成」を重視していく。後期課程においては、その土台の上に立ち、自らの学習をデザインし、振り返りを次なる行動へと繋げる「実践・確立」を目指す。この九年間の長期的スパンで、児童生徒の成長を見守り、真に根付いた「自律」を促すことができると考えた。

4 研究仮説

道徳教育を基盤とした自律心を育むと共に、「精選された発問」と「ICT機器の効果的な活用」を核として授業改善を推進すれば、児童生徒は「自律した学習者」へと成長するであろう。

5 本校で身に付けたい資質・能力

4つに精選し、振り返りの視点とする。

項目	目指す資質・能力
①	他者（ひと）とうまくやっていく力（オレンジ）
②	自己（じぶん）を磨く力（ピンク）
③	課題（かべ）を乗り越える力（青色）
④	未来（さき）へつなげる力（黄緑色）

※本校で身に付けたい資質・能力について年度初めに

①昨年度の児童生徒アンケートから、特に高めたい力を設定する。

②文言で整理し、具体的な目標として児童生徒と共有化を図る。

6 研究の内容

（1）自律心の向上を目指す授業づくり

・道徳教育の充実

道徳教育の充実において特に、道徳科の充実を図る。校内研修を組み、授業者の困り感の共有や道徳科の授業づくりの向上を図る。チーム担任制を生かし、学年部で相談しながら道徳科の授業を創っていく。授業においては、本時の振り返りの時間を十分に確保し、授業・協働を通しての自分の変容などに気付いたり、これからの自分の生活にどう生かしていくのかなどについて、考えたりする時間を確保する。

・精選された問いを推進する授業改善による、資質・能力の育成

児童生徒の思考を揺さぶり、多角的な視点を引き出す問いへと質的転換を図る。「なぜそう考えたのか（根拠）」「どちらの方法が効率的か（比較・選択）」「もし～だったらどうなるのか（仮説）」といった、判断や選択を伴う発問を意図的に仕掛ける。加えて教材解釈・教材研究を行い、身に付けさせたい力を基に、授業者自身が教材を丁寧に分析する。レディネステスト等から現状を把握し、自己選択の場を設け、学びに向かうことができるよう発問を工夫したりするなど、児童生徒が主体的に参加できるように工夫をしていく。

・ICT機器の効果的な利用

Chromebookを自己表現のツールとして活用する。ロイロノート内の思考ツールを活用する等、情報や自分と他者との考えを整理し、アウトプットする活動を積極的に取り入れることで、他者との共有や比較が可能となる。また、自分に合った学習のペースや方法を「自ら選択する」場面を設定することでICT機器を「使われる」のではなく、目的達成のために児童生徒が「選び取る」ことになり、学びの主導権を児童生徒に委ねることにつながる。

(2) 自己の学びを振り返る場の推進—PDCAサイクルを回し、資質・能力を育成していく

ア 各教科における授業の振り返り

各教科振り返りシート及び授業ノートを用いた振り返りを行う。単元を通して、自らの学びの振り返りを行う。（本校の振り返りの視点【め・い・きょう】）

イ 学びの振り返りの時間確保

- ・授業後の感想や毎日の振り返りを「学びのカード」としてロイロノートに記入し、学びを蓄積させていく。その際も、振り返りの視点【め・い・きょう】を意識させ、入力させる。ロイロノートの活用により、児童生徒同士の意見共有の場を確保しやすくする。

（ただし、1年生（3学期）・2年生は手書き用のワークシートで「学びのカード」を書かせることから実施し、実態に応じてロイロノートへの記入に挑戦する。）

- ・毎月末、作文シートを綴ったり、学びの足あとを記入したりし、児童生徒に内省的に自己の学びを振り返らせることで、自らの学びを自覚させる。

【振り返りの視点】め・い・きょう

め＝目からうろこ（新しいことを発見した、新しい知識を得た）

い＝いいね！（自分も友達も、いい考え方やいい過程があった）

きょう＝今日から使える（他の教科や生活に活かせることを学んだ）

今日、もう一度勉強してみたい（まだ分からないところがあった）

(3) 基礎学力の育成（表現を支える語彙・語句を増やす指導）

ア 朝読書・朝学習（8:20-8:25を朝の会とし、8:25-8:35の10分間を朝読書・朝学習とする）

※前期は、各学級の実態に応じて、国・算ドリル、読書、個人チャレンジを組み合わせる。

※後期は、月・水・金に、必ず各学年・教科の必要に応じたプリント学習等を行う。

※9年生は、セミナー学習（2月末から8年生もセミナー学習）を行う。

イ 帰りの会

- ・「学びのカード」に記入する。

・文章読解 ・読書 ・ひらがな、カタカナ、漢字の書き取り ・意味調べ（国語辞書）、漢字調べ（漢和辞典） ・ことわざ、慣用句、俳句等の暗唱や音読 ・音読 ・計算問題・読解など

ウ ぐんぐんタイム

帰りの会終了後、下校時間まで行う。

- ・前期：振り返り（カードへの記入は週末）→ 国語・算数を中心とした学習

- ・7・8年：資質能力の振り返り（カードへの記入は月・水・金）

→各教科の基礎学力向上のための学習orタブドリLive

- ・9年：資質能力の振り返り（カードへの記入は月・水・金）

→セミナー学習orタブドリLive

・文章読解 ・読書 ・漢字の書き取り ・意味調べ ・ことわざ、慣用句、俳句、古典等の暗唱や音読 ・音読 ・計算問題・英単語、英文法など

※ぐんぐんタイムの目安時間（分）

学年	月	火 委員会・サポート活動の際は無し	水	木	金
1年	15		15		15
2年	15		15		15
3年	20		20		20

9 研修について

(1) 授業モデルの構築 (別紙)

〈授業モデルの原理・原則〉 個と集団の有機的な関連を図り、自己内対話を促す。

- ① 一人一人が、自分事として教材・題材に向き合い、自分の考えを持つ (個の視点)
- ② 自分の考えをもって学び合いに参加する (集団の視点)
- ③ 自分の考えを他者の考えと比較、関係付け、統合などしながら練り直す (集団の視点)
- ④ 練り直した考え (新たな価値) で、教材・題材と向き直し、学びを深める (個の視点)

(2) 研修の進め方

- ・全体研修では、研究テーマに即した講師を派遣し、全体の意識向上や授業改善に生かす。
- ・授業研修では、事前研修・模擬授業・事後研修を通して、教職員の学びを深める。
- ・授業研修後は、研修での学びを日々の授業に生かす。

10 授業研究について

授業研究・研修に対する共通理解を深める。

- | | | | | |
|-------------|----------|-------------|----|--------|
| (1) 第1回授業研究 | 5月28日(火) | <u>前期課程</u> | 6年 | 道徳科 |
| (2) 第2回授業研究 | 11月6日(金) | <u>前期課程</u> | 3年 | 総合的な学習 |
| | 11月6日(金) | <u>前期課程</u> | 5年 | 道徳科 |
| | 11月6日(金) | <u>前期課程</u> | 7年 | 英語科 |
| | 11月6日(金) | <u>前期課程</u> | 8年 | 総合的な学習 |
| (3) 第3回授業研究 | 2月5日(金) | <u>後期課程</u> | 8年 | 道徳科 |

- ・全体授業研究ではない前期・後期課程校内授業研修においても、前期・後期の枠を超えて授業研修に参加できるよう、授業研究は原則として部活動休業日に設定し、授業づくり・授業改善に生かす。

11 9年間教育の取組

- (1) 前・後期課程9年間を見通した、一貫性のある指導になるよう工夫・改善を行う。
前期課程における後期課程教員による教科担任制の導入。

- (2) 府中明郷学園9年間教育大綱の進捗状況の把握と改善策を考え、指導に活かす。

学校評価システムを活用した指導方法の工夫改善に係る、学校評価についての基本的な考え方や、9年間教育を推進していく上での評価の在り方と具体的な展開等についての研修を、講師等を招聘して実施する。また、外部評価により、教職員と地域住民・保護者が現状と課題について共通理解を持ち、協力することにより教育活動や学校運営の改善を適切に行うことができるようにする。さらに、児童生徒・教職員・保護者が、実践の過程や成果(結果)の価値に気付く力を高め、それらを共有するようにしていく。

- (3) 児童生徒・地域の人材による異年齢集団の学習活動を実施する。

クラブ活動、学園体育祭、学園文化祭、学園マラソン大会、CS活動など

- (4) 家庭学習ノートを取組を継続・深化する。